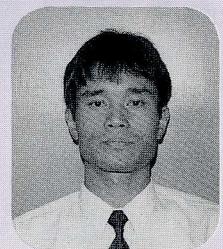


経済の国際的な関係について

経済学部 理論・計量経済学講座 越智泰樹



国際化がすすみ、外国との取引なしでは日本経済そのものが成り立たなくなっています。経済の国際的な関係を考えるときに、「国際収支」、「外国為替レート」、「対外純資産」は、重要な統計データです。これら三つの意味を解説し、さらに経済の発展段階による循環的な動きを見て、これから日本の日本経済の行方を考えます。

「アメリカが、外国である。」とは？

「日本」と「アメリカ」の二国について、経済の国際的な関係を考えましょう。経済とは、結局、生産物や証券（債券、株式）などの取引物を、「貨幣」と交換することです。その交換の比率、つまり、取引物一つに対して渡す貨幣の量が、取引物の価格です。「図1」のように、この交換にあたり、日本では、もっぱら「円」という「貨幣」が使われ、アメリカでは、もっぱら「ドル」という「貨幣」が使われています。「円」を持つ日本人は、「円」と交換に、日本の生産物や証券入手できません。いつたん「円」を「ドル」

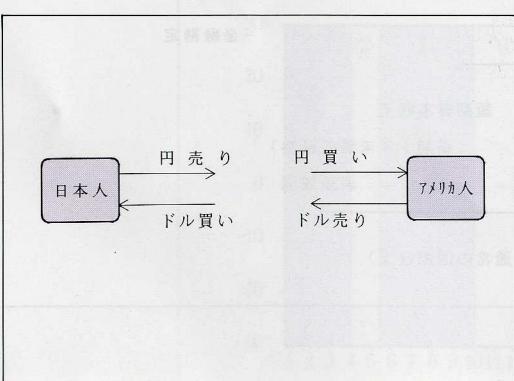
に交換してはじめて、「ドル」と交換に、アメリカの生産物や証券入手できます。これが、「日本人にとって、アメリカが外国である。」ということです。逆に、「ドル」を持つアメリカ人は、いつたん「ドル」を「円」に交換して、「円」と交換に、日本の生産物や証券入手できます。

「国際収支」とは？

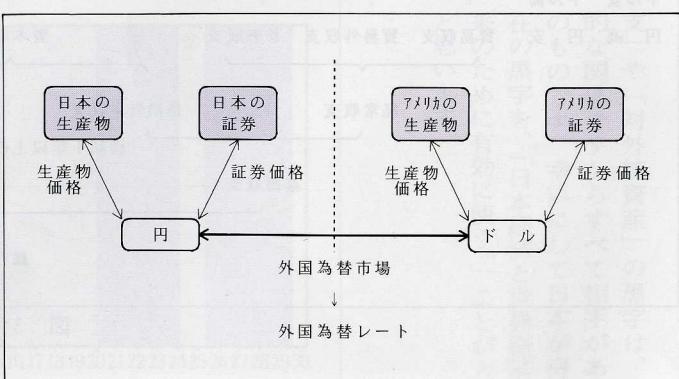
こうして「図2」のように、「円」を「ドル」に交換したい（円売り・ドル買い）日本人と、「ドル」を「円」に交換したい（ドル売り・円買い）アメリカ人が出会い、「円」と「ドル」を交換するが、「外国為替市場」です。この交換の比率が、「1ドル＝110円」のような「外国為替レート」、つまり、「1ドル＝110円」の量な

「国際収支」とは、「図3」のように、「ドル」で計算すれば、「ドル売りの量－ドル買いの量」（円で計算すれば「円買いの量－円売りの量」）です。ドル売りが、ドル買いを上回れば、「ドル」の価格である「外国為替レート」は下がり、たとえば、「1ドル＝110円」から「1ドル＝100円」になります（ドル安・円高）。逆に、ドル買いが、ドル売りを上回れば、「外国為替レート」は上がり、「1ドル＝110円」から「1ドル＝120円」になります（ドル高・円安）。

さらに「国際収支」は、「どういう取引にともなって、円とドルを交換（円売り・ドル買い、ドル売り・円買い）

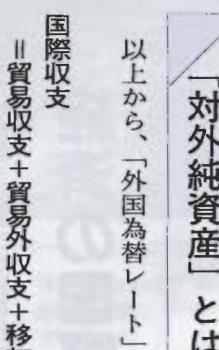


[図 2]



[図 1]

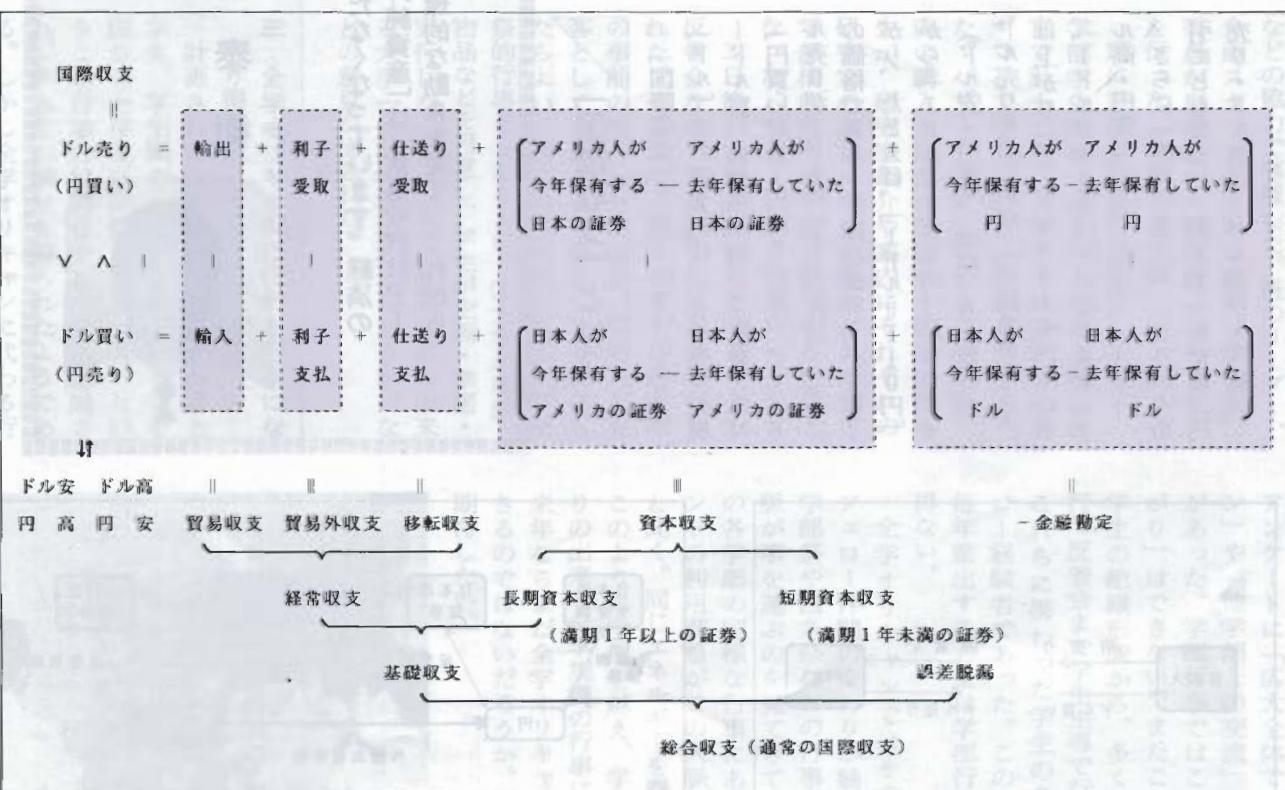
しようとするか?」によって、「図3」のような各種の収支に分けられます。アメリカ人が日本の生産物を入手する「輸出」では、「ドル売り・円買い」をし、日本人がアメリカの生産物を入手する「輸入」では、「円売り・ドル買い」をします。生産物の取引にともなう「ドル売りの量 - ドル買いの量」が、「貿易収支」です。また、今年アメリカ人が去年よりも多く日本の証券を保有するには、「ドル売り・円買い」をし、今年日本人が去年よりも多くアメリカの証券を保有するには、「円売り・ドル買い」をします。証券の取引にともなう「ドル売りの量 - ドル買いの量」が、「資本収支」です。【正】のときは、日本がアメリカに借金し、赤字(負)のときは、日本がアメリカに貸しています。さらに、今年「外貨(日本人にとってドル、アメリカにとつて円)」の保有を追加するとともに、円とドルが交換され「ドル買いの量 - ドル売りの量」が、「金融勘定」です(「ドル売りの量 - ドル買いの量」でないことに注意)。



+ 資本収支 - 金融勘定

によって変動しますが、「円」と「ドル」の交換が終わると、必ず、「国際収支」=0になります。たとえば、アメリカ人が日本の生産物を入手する「輸出」だけが行われるとしましょう。アメリカ人は「ドル売り・円買い」をして、日本人に「円」を支払うとしますが、交換の相手「円売り・ドル買い」がありません。すると、「外国為替レート」は「ドル安・円高」になり、もし「ドル売り・円買い」と同額の「円売り・ドル買い」が出てくれば、無事「円」と「ドル」が交換され、もちろん「国際収支」=0です。「円売り・ドル買い」が無いときは、アメリカ人は代金を「円」で支払えず、日本人に借金する(日本人がアメリカの証券を追加保有)か、そのまま「ドル」を日本人に渡すか、そのままで「ドル」を追加保有するしかありません。こうして、「輸出」にともなう「ドル売り」は、同額の日本人のアメリカの証券または「ドル」の追加保有によって帳消しになり、やはり「国際収支」=0です。

そこで、「日本の今年(去年)の对外負債」(「アメリカ人が、今年(去年)保有する日本の証券と円」、「日本の今年(去年)の对外資産」)(「日本人が、今年(去年)保有するアメリカの証券とドル」)ですから、



[国 3]

経常収支

II 貿易収支 + 貿易外収支 + 移転収支

II-1 資本収支 + 金融勘定

II (日本の今年の対外資産)

- (日本の去年の対外資産)

- (日本の今年の対外負債)

- (日本の去年の対外負債)

- (日本の今年の対外資産)

- (日本の去年の対外負債)

- (日本の今年の対外負債)

- (日本の去年の対外資産)

- (日本の去年の対外負債)

- (日本の今年の対外資産)

- (日本の去年の対外負債)

- (2) 「貿易外収支」は、対外的な貸借関係による利子の受取、支払や、海外旅行にともなう「円」と「ドル」の交換です。ここでは簡単に、「貿易外収支」 = 「去年の対外資産に対する利子の受取」 - 去年の対外負債に対する利子の支払」 = 「去年の対外純資産 × 利子率」とします。
- 移転収支は、省略します。
- (4) 最初の「対外純資産」 = 0とします。

赤字を上回り、対外純負債が減少し始める（返済国）。

④「未成熟な債権国」

対外純負債を返済し終わり、対外純資産（債権国）に転じ、貿易収支、貿易外収支とともに黒字となる。

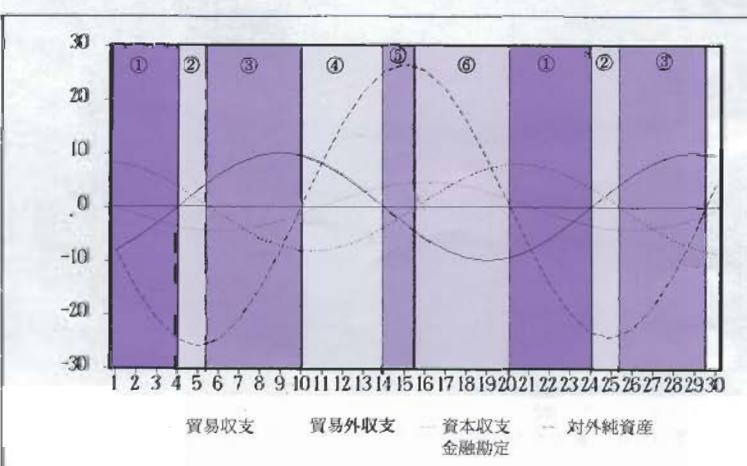
⑤「成熟した債権国」

貿易収支は赤字に転落するが、貿易外収支の黒字が上回り、対外純資産が増え続ける。

⑥「債権取崩し国」

貿易収支の赤字が、貿易外収支の黒字を上回り、対外純資産が減少し始める（取崩し国）。

支」や「対外純資産」の黒字は、国際的な関係ですからすべて相手があつてのものです。幸いにして日本が得た現在の黒字を、「日本経済と世界経済の将来のために有効に使う」ことが大事だと思います。



[図 4]

これからの日本経済の行方

これをもとに、次のような仮定をおいて、経済の国際的な関係がどのように変化するかを考えましょう。

(1) 「貿易収支」は、その国と相手国の経済状態や国際競争力によって決まりますが、「図4」のように循環的に変動し、赤字と黒字を繰り返す。

- ①「未成熟な債務国」
貿易収支、貿易外収支とともに赤字で、対外純負債（債務国）が増加する。
- ②「成熟した債務国」
貿易収支は黒字に転じるが、貿易外収支の赤字が上回り、対外純負債が増え続ける。
- ③「債務返済国」
貿易収支の黒字が、貿易外収支の

この発展段階は、歴史上、変動のパターンは異なりますが、イギリス、アメリカなどの有力な資本主義国が、同様にたどってきたものです。イギリスは、しばらくの間、⑤「成熟した債権国」を続けましたが、⑥「債権取崩し国」に転落しました。今のアメリカは、レーガン政権時代に、⑥「債権取崩し国」から債務国（対外純負債）に転落しました。日本は、現在、④の「未成熟な債権国」の段階です。日本が、有力な資本主義国としてイギリス、アメリカの後を追うとすると、⑤「成熟した債権国」へと進むのは避けられないのでしょうか？ はたして段階の進行を、止める必要はあるのでしょうか？ しかし「経常収